

ロンドン橋のポール・ヴァレリー

塚本昌則

ヴァレリーは、1894年と1896年の二回、それぞれ一ヵ月ほどロンドンに滞在している。ヴァレリーがロンドンを訪れるのは、1894年が初めてでもなければ、1896年が最後でもない。しかし、22歳と24歳の時のこのロンドンへの旅は、ヴァレリーに随分強烈な印象をあたえたい。例えば、1899年に作成された自伝年譜の人生の出来事欄とでも呼ぶべき箇所に、ヴァレリーは二度ロンドンの名を書き込んでいる¹⁾。1905年作成の年表においても、影響を受けた思潮や人物の名前、さらには彼自身のエクリチュールの実践や彼が見出した概念に並べられる形で二度のロンドン旅行が言及されている²⁾。ヴァレリーがこうした年表に都市の名を記すのは極めて稀なことである。

では、ロンドンのいったいどこがヴァレリーをこれほど引きつけたのだろうか。ロンドンには彼にとってどのような街だったか。この点は、ヴァレリーがロンドンと並んでこよなく愛した街ジェノヴァ³⁾と比べると幾分見えにくい。幾分というのは、このイタリアの都市が何よりもまず母の街であり、ある名高い嵐の一夜が過ごされた街でもあり、要するに象徴的な次元を確固として持っているのに対し、イギリスの都市の方にはそのような象徴的な広がりはありませんからである。また、ジェノヴァは、異国の街であると同時に幼年期から馴染んだ街として、ヴァレリーの筆が繰り返し立ち戻る空間でもある——「わたしは自分が住んだあらゆる街の中でジェノヴァが一番好きだ。というも、この街ではわたしは土地をよく知らない人間であると同時に土地に馴染んだ人間であり——子供であると同時に異国人であるからだ⁴⁾。」それに比べて、ロンドンをめぐって書かれたものはそれほど数多くあるわけではない。書簡、対談、回想、『カイエ』、例外的に「ロンドン・ブリッジ」という散文詩があるだけである。

しかし、こうした言ってしまうれば雑多なテキスト群を読んで行くと、そこにロンドンがヴァレリーにとってどのような空間であったのか、その輪郭が描き出されているように思われる。そして、その輪郭をいったん視野に収めてしまえば、必ずしもロンドンに言及していないテキストにおいても、ロンドン体験のエッセンスとでも呼ぶべきものが、ヴァレリーのエクリチュールのなかで繰り返し生きられる様が見えてくるのではなからうか。もちろん、この旅行にあまりにも重要性をあたえ過ぎるのは危険である。別にヴァレリーはロンドン旅行記を書いているわけではないし、ロンドンを舞台としたテキストを次々に発表しているわけでもない。ただ、現実のロンドンを離れてヴァレリーの想像力に深く根を下ろしたもうひとつのロンドン、もはやロンドンという固有名詞を必要としないほど彼のものとなったある空間への眼差しのようなも

のが、若年期の二度の旅行の間に形成されたと見えるのである。そこで形成されたというのが言い過ぎであれば、それ以前から生来の傾向としてあったものが、ロンドンという触媒にふれることで明確な形を取ったと言い直してもいい。

形を取ったというのは、言うまでもなく書かれることによって生きられるひとつの空間が形成されたということである。興味が引かれるのはこの点、ロンドンという現実の街がいかにしてヴァレリーのエクリチュールのなかに取り込まれて行ったのかという点である。1894年と1896年のロンドン滞在前後および滞在中の出来事については、すでにセシリー・マックウォースが詳細な研究を行っている⁶⁹。また、ジャン・ルヴァイヤンは、もっぱら『テスト氏との一夜』の生成という観点からヴァレリーの二度のロンドン旅行を論じている⁷⁰。われわれとしては、若年期のロンドン体験がヴァレリーのエクリチュールとどのように係わっていたのかという点を中心にして論をすすめて行くことにしたい。

1. ロンドンへの旅立ち

1894年6月6日、22歳のヴァレリーはロンドンに向けて出発、そしておそらくは6月29日にパリに戻っている⁷¹。ロンドンでは、ハイペリー・クレセント十番地の母方の伯母ポーレット宅に滞在。ポーレット・グラッシは、母方の祖父の妹で、実際にはヴァレリーの大伯母にあたることになる。彼女は、イタリア系イギリス人ド・ランと結婚、間にポーリーヌという娘をもうける。この従姉妹はヴァレリーと同じ年頃で、詩の好きな娘だったらしい。ヴァレリーは、翌年、ピネッタという愛称のこの従姉妹に宛てて、一種の詩人心得とでも言うべき手紙を書き送っている⁷²。

どうしてロンドンに行く気になったのか、当時の手紙を読むかぎり、ヴァレリー自身ははっきりとした答えを持ち合わせていなかったようである。「ロンドンに行こうと思う。ながたらしい一日を過ごしているうちに、思いついたというわけだ。じきに行くつもりだ。もちろん、ばかっている。空間と方向の研究に、巨大な都市と公園を構築するという建築家的夢想に、荒々しく機械的な英仏海峡の運動と律動に、予め戻ったほうがましというものだ⁷³。」そもそも22歳の若者が、ふらっと外国の街に出掛けなくなった理由を詮索する方がおかしいのかもしれない。

しかし、ジッドに宛てた言葉はある種の照れと取れないこともない。というのも、このロンドン旅行の背景には明らかにマラルメの影響があるからである。後年の回想においては、ヴァレリーはこの点をはっきりと認めている——「ある日のこと、わたしはマラルメがきわめて魅力的だとよく語っていたこの街に突然行きたくなくなりました⁷⁴」。ヴァレリーに限らず、マラルメがロンドンという街に抱いた愛情⁷⁵は、レオン・ドーデ、アンリ・ド・レニエ、ピエール・ルイス、マルセル・シュウォブといったローマ街に足繁く通う若い世代の作家・詩人たちに影響をあたえ、1890年代のフランスの文

人たちの間に起こったロンドン・ブームの一因となっている¹⁰²。

しかし、ヴァレリーの場合、「火曜会」に通う他の若者たちと較べて、事情が少し特殊だったと言えよう。よく知られているように、マラルメの存在はヴァレリーの1892年の危機の直接の原因のひとつだったからである。「突然啓示されたマラルメとランボーの特異な詩の完璧さによって意気相喪した精神の絶望¹⁰³」は、「自分の内部で文学をギロチンにかけ¹⁰⁴」させるほど強かった。同時に、知り合ってからマラルメに対しては、彼が十五歳の時に失った父親に対する以上の愛情を抱いていたことも知られている。1898年、マラルメの死の数日後、ヴァレリーはマラルメ未亡人に次のような手紙を認めている。「私は本気で告白いたします、私自身の父の死もこれほどまでには嘆きませんでした¹⁰⁵」。こうして、ヴァレリーは「憎しみと愛とが入りまじった感情、容赦なき親密感¹⁰⁶」をマラルメに抱くことになる。「わたしはこの並はずれた人を崇拜しました。しかし同時に、わたしはこの人物に唯一の頭——法外な値段の！——それを切り落とせばローマをすべて壊滅させることが出来るような唯一の頭を見ていたのです¹⁰⁷」。ヴァレリーは、彼に文学を断念させるほどの強力な人物のそばで、明確なヴィジョンを持ってないまま文学と関わっていたのである。敬愛の対象であると同時に倒すべき相手であるマラルメが愛したものに、どうして無関心でいられるだろうか。それが言い過ぎだとしても、マラルメは1894年2月24日から3月6日まで、オックスフォードとケンブリッジで講演するためにロンドンを再訪しており¹⁰⁸、その余熱が「火曜会」にほとんど欠かさず出席していたヴァレリーに伝わったと考えることは許されるだろう¹⁰⁹。

それだけではなく、ヴァレリーは行き詰まりに陥っていたそれまでの生活からいったん離れる必要を感じていたのではないかと思われる。当時のヴァレリーは、以前の詩作に代わるエクリチュールの新しい形を暗中模索していた。「このかくも不平不満の才にたけた若者は、想像された物が干あればそのうちの九百九十九まではこきおろす。[...] 彼の方では何ひとつ創造したことがない〔のにね〕、そうだろう?」¹¹⁰ ヴァレリーは、それまでの詩作に満足もできず、かといって何らかの確信が抱けるような活動の形式も見出せずにいたのである。そして、この展望を欠いた不確かな感触は、「身を立てなければならぬ¹¹¹」という状況に迫られていたために余計重苦しいものとなっている。すでに父親を失い、八歳年長の兄を「後見監督人」として母と三人で暮らしていたヴァレリーは、学業を終えると同時に自分の生活を自ら確保して行かなければならなかった。裕福なジッドや、1892年に十万フランの遺産を相続したルイス(ただし彼はこの遺産を四年間で蕩尽する)¹¹²とは異なり、ヴァレリーはまず職を見つける必要があったのである。こうしてヴァレリーは、必要な数学の本を買うお金もなく、本当の住まいと言える場所も持たず、さらには活動の方向さえはっきりとはつかめないまま、1894年3月からゲイ・リュサック十二番地ホテル「アンリ四世」でのパリ生活を始めたことになる。「ぼくがあらゆる野望、あらゆる楽園、あらゆる明日を殺してから久しく

なる。ぼくは長いことすべてを受け入れてきた。でも、不安定さに堪える力も限界に達した¹⁰⁰。」マラルメの語っていた言葉が行き先を決めるのに貢献したとすれば、そもそもパリを離れてどこか外国の街に行きたいという気持ちになった背景には、この当時の危機的な状況があったのではないだろうか。

しかし、出発する前の将来に対する展望がどのように暗いものだったとしても、ロンドンには、その知的高揚感を促す力によって、すぐにヴァレリーを魅了することになる。

この滞在の間、わたしは中心街からは随分と遠い所、ハイペリー街に住居を定めました。窓の下には広大な芝生が広がり、朝にはそれが六月の太陽に照らされて穏やかな金色に輝きました。それがクレセントと呼ばれる土地でした。そこでは、ある時にはサッカー・チームがゲームを行い、ある時には怠惰に寝そべった散歩者が無為に身を任せていました。わたしはその時まで、そのような無為安逸が自分の出身地であるミディ以外のどこか別の場所に存在するとはついぞ思ったことがなかったのです。実際、わたしはその日、北国にも浮浪者がいることを発見したのでした。わたしはロンドンを朝から晩までさまよい歩き始めました、際限もなく一人で、しかし心の中は思考でいっぱいにみだされて。わたしはあまりにも賑わいに満ちているか、あまりにも人気がないかする首都の通りを、目的もなく、終わりもなく、無上の悦楽をもって漂い歩いたものです。わたしにとっては、ロンドン風の知的陶酔というものが存在するのです¹⁰¹。

この「知的陶酔」が、ロンドンを描くヴァレリーの筆に繰り返し現れ、変奏されて行く第一の主題である。ヴァレリーは「知的な」という形容詞を使っているが、それがここでは限りなく官能的な知性の在り方、初めて見る事物の輝きと戯れる快感に浸りきるような知性の在り方である点に注意しておきたい。思考がそれまでの慣性から解き放たれ、はじめて世界と出会ったかのようにしてそれを眺め、サッカー選手や散歩者や浮浪者の姿にも驚く——この官能性に満ちた知的快楽は、その後ロンドンのさまざまな側面に触れるにつれて変奏されて行くことになる。しかし、変奏された形態がどのようなものであれ、基本的には思考がある自由な運動の場を得て高揚する状態だと言えるだろう。あらゆるものが興味をかき立て、あらゆるものが思考を促し、さらには思考の流れそのものがひとつの快楽になるような精神状態、それが「ロンドン風の知的陶酔」である。ヴァレリーは上の引用に続けて次のように語っている。「あらゆるものがわたしの精神を楽ませましたと言えます。そして、それ以来、神経を高ぶらせる定義しがたい陽気さという漠然とした印象がある時には、その印象は、わたしにとっては、一般にはかくも愉快な興奮を与えるとは思われていない都市と國家の想念に結びついたままなのです¹⁰²。」

こうして孤独な散歩者の夢を繰り広げる一方で、ヴァレリーはイギリスで活躍する文人・芸術家たちと精力的にコンタクトを取っている。ロンドンに渡る前に、ヴァレリーは彼が尊敬するマルセル・シュウォブにメレディスへの紹介状を書いてもらっている⁹⁰。またヴァレリーは、「火曜会」で知り合ったチャールズ・ウィブレーを通してペンネル夫妻のサロンに招かれ、そこでさまざまな知己を得ている⁹¹。この二人のアメリカ人夫婦は、ヘンリー・ジェームスやホイスラーといった錚々たる芸術家たちが集まるサロンを、バッキンガム・ストリート十四番地の彼らの家で開いていた。このサロンは、とりわけ『イエロー・ブック』、ヴァレリーの表現に従えば「フランスでの象徴主義運動に対応するイギリスでの運動の中で比較的重要な役割を果たしていた、と思われる⁹²」雑誌に関係していた芸術家たちがよく来ることで知られていた。ヴァレリーは、この雑誌の装飾を担当していたピアズリーとロートレックについて語り合ったり、エドモンド・ゴスとマラルメについて議論し合ったりしている⁹³。さらに、ヴァレリーはこのサロンでウィリアム・ヘンリーとも知り合っている。この出会いは96年のロンドン旅行の際、ヴァレリーにとって大きな意味を持つことになる。

しかし、書かれた街としてのロンドンに話を絞る限り、こうした文人たちとの交流のなかでも一番興味深いのは、メレディスとの交流、とりわけ彼の家を来訪した際のヴァレリーの思い出の記述である⁹⁴。このメレディス来訪は、どうやらヴァレリーの十八番のひとつだったらしく、ジュリアン＝カーンが次のように証言している。「ヴァレリーは、ロンドン郊外のメレディスのコテージを探して歩き回り、ようやく辿り着いた時のことを暇つぶしに語ったものでした⁹⁵」。このちょっとした地獄巡りの中でも、特に注意を引かれるのは次の一節である。

目的地に到着すると、列車はわたしをただ一人、何の誇張もなくただ一人ボックスヒル停車場に残してふたたび行ってしまいました。わたしの周りには誰一人としていません。住居もなければ、道路標識もなし。家までの道のりをどこでどのようにして見つければいいのかだろう。数分後には、わたしは強い不安を覚えるまでになっていました。敢えてレールから離れることはできませんでした。そうすれば、一步毎に目的から遠ざかることになるかもしれないのですから。わたしはすでに終身ボックスヒルの停車場に釘付けになる刑を宣告されたような気分になっていました⁹⁶。

そこにチェックのハンチングを被り、口にパイプを銜えた一人の男が現れ、ヴァレリーに、あなたがミスター・メレディスが待っているフランス人かと尋ねる。「わたしは即座に、熱狂的に、絶対的に、きっぱりと、間違いなく、ムッシュ・メレディスの待っているフランス人となりました⁹⁷」。こうして道々、コールスと名乗るその男が1889年の博覧会を觀にパリに行った話を聞きながら、ヴァレリーは導かれるがままに

歩き出す。やがて、コースがここからは道がまっすぐだからと辞去する。「ところがわたしの前に広がるのは以前とおなじ草原ばかりで、壁もなければ生け垣もなく、家の影もありませんでした。そこでわたしはしょうがなく指示された方角へと歩きました⁽⁹⁾。」やがて道は少しずつ登り坂になり、その坂の頂上に夕日を浴びて金色がかったものの影が見えてくる。それがメレディス邸であった。

ヴァレリーの話は、ここからさらに初めて会うメレディスの様子、掘って立て小屋じみた彼の住まいの中の描写、メレディスの語った印象的な言葉等々と尽きずに続くが、さしあたり注目したいのは、ボックスヒルの停車場で進むべき方向を見失った数分間に対するヴァレリーのこだわり方である。ヴァレリーはその時不安で胸苦しくなるまでの危機感を抱く。さらに、導き手がここからはまっすぐだからと言って去ってからも相変わらず何の指標もないことに対して敏感である。もちろん、ヴァレリーは異国での生まれた国とは勝手の違う状況を、単におもしろおかしく語っているだけなのだと見ることもできるだろう。しかし、進むべき方角が分からずに途方に暮れることは、そもそもヴァレリーをロンドンに導いたものと同じ事態ではないだろうか。今いる地点から一歩も踏み出せずに茫然とすることは、ヴァレリーにとって、ロンドンのある本質的な部分を構成しているのではないだろうか。

いずれにせよ、多かれ少かれロンドンに関係するヴァレリーのテキストを読んで行くと、方向喪失の体験はなにもメレディス邸へ行く道すがらで起こったことだけではないことが理解される。官能性を帯びた知的興奮を第一主題とすると、この不安の渦巻く方向喪失は、第二の主題としてヴァレリーの言葉が描き出すロンドンという街の中で変奏されて行くことになる。

2. 「ラ・シティー」

では、知的陶酔のテーマと方向喪失のテーマは、どのような形で展開されて行くのだろうか。

84年の旅行に関するかぎり、方向を見失って茫然とする瞬間を重要なポイントとするようなテキストは書かれていない。旅行中、さらには旅行から戻ってからヴァレリーが書いたものの中では、ロンドンをもっぱら知的快楽を喚起する街として捕えられていると思われる。思われるというのは、それらのテキストにおいてロンドンという固有名詞が使われていないか、あるいは使われていても後に削除されることになるからである。問題となるテキストは、この年の夏書き始められたと見られる『テスト氏との一夜』の第一稿、及び1895年の『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』中のある一節である。

『テスト氏との一夜』の第一稿、『騎士デュパンの回想録』は、決定稿の出だし二ページに対応する未完の短いテキストである。このテキストの題名の前にヴァレリーは

「ロンドン、18...」という書き込みをしている⁹⁶。この記述に関連して、やはり1894年に書き始められた『カイエ』の第一冊目「航海日誌」に次のノートがある。

騎士オーギュスト・デュパンの生涯と孤独な冒険

騎士デュパンの回想録。——ロンドン、1853年。

精神のカザノヴァ⁹⁷

このノートから見て⁹⁸、先の記述はテキストの舞台を設定したものと考えられる。では、どうしてヴァレリーはこの作品の背景にロンドンを選んだのだろうか。イギリスの首都は、作品の中でどのような役割を果たすことになるのだろうか。

テキスト自体には、この疑問に答える箇所はない。しかも、単にロンドンについて展開される箇所がないだけでなく、ロンドンという固有名詞はやがては抹消される運命にある。そこで視点をロンドン滞在中に書かれたものに転じてその周辺を探って行くと、ロンドンが持つさまざまな側面の中でも、とりわけ旧ロンドン市部に位置する商業・金融の中心区域が当時のヴァレリーを熱狂させていたことが分かる。

「金融街」la City はぼくにこんなことを思わせる。いつの日か、誰もがこの場所、そこにいる人々、さらにはその生活環境を、ちょうどぼくたちが歴史的な事物、可燃性で、いまは炎が見えているがいずれは灰になってしまうものを見ているようにして、おそらくは眺めるようになるだろうということ。そうだ、わが友よ、商業、この人と人とのやり取りこそが、ぼくたちの時代でこの上なく熱狂的なもの、この上なく「自然」なもの、この上なく崇高なものなのだ。たとえば、ぼくは、皮肉な気持ちで、まだどんな芸術家もこの領域を自分のものにはしていないことを確信する。たとえそこに足を踏み入れても何ひとつ理解しやしないだろう。ゾラの小説だって!...

ぼくは、そこにこそ時代の本質的なメカニズム、精神にとっての複雑さの見事な祭典があると信じる⁹⁹。

パリに戻ってから、やはりジッドに宛てて書いた手紙の中でも、ヴァレリーは「金融街」、人と人が金をやり取りする活気に満ちたその姿への熱狂的な思いを伝えている。「何よりも刺激的だったのは、『ラ・シティー』、つまりは商取引だ。それを研究する暇はなかったが。そこには機械室か心臓の内部といった趣がある。ぼくたちのヒーローはそこにいるのだ¹⁰⁰。」このパリでは感じなかった流動する都市の感触は、新たなエクリチュールの形を求めていたヴァレリーに影響を与えずにはいられなかったようである。「ごく最近まで、ぼくは詩を読み、研究し、自分でも書いていたが、その時期だったら、こうしたことを考えたり話したりするくらいなら自分の舌と頭を切り落と

していたことだろう⁹⁹。つまり、マラルメとランボーの詩の完璧さの前で絶望しながら、別の活動をどのようにして行えばいいのかわ明らかな考えを持たずにいたヴァレリーに、ロンドンに詩の領域を離れて行う新たな活動の素材を提供したわけである。こうして、22歳のヴァレリーによればまだ書かれていない「金融街」を主題としたテキスト、書簡から判断すればおそらくは小説、同時期の『カイエ』のノートによれば論文¹⁰⁰が、この時期詩とは異なった新しい言語活動の対象として浮上することになる。

もちろん、以上の背景から『騎士デュパンの回想録』が「ラ・シティー」を主題とした小説だと言うことはできない。むしろ、書かれた部分について言えば、そこで展開される世界はおよそ固有名を持った土地が活躍する余地をほとんど残さないようなものだと言えよう。決定稿とは幾つかの異同があり、その中には無視できないほどの違いを見せているものもあるが、基本的には「テスト氏との一夜」の冒頭部と同様語り手が行うのは人生の決算書を出すことである。個々の体験を数え上げ、自己の精神が勝ち誇った瞬間だけを子供らしく繋ぎ合わせてみれば「幸福な人生」を想像することもできるが、しばしば舞い戻る想念は「自分にとってはすべては失われてしまった」というものである¹⁰¹。この終わりから始まる物語を、語り手は個別の体験を貫いてきた精神の変換方式、さまざまな出来事に立ち向かう際に心掛けてきた原則を抽出するという形で展開しようとする。そこでエクリチュールが従う運動は、そうした人生の骨格とでも言えよう理論の姿をあらわにし、その盛衰を語ることである。体験からその個性を奪い去るような精神という虚構、あらゆる出来事がその精神によって「一瞬にして汲み尽く¹⁰²」されてしまうような世界、それが『騎士デュパンの回想録』というこのわずか二ページのテキストで目指されていることにほかならない¹⁰³。

しかし、ここで注意すべきなのは、『騎士デュパンの回想録』が「テスト氏との一夜」とはまるで異なった作品構造を持っているという点である。最初のテキストにおいては、「わたし」は語り手=主人公であり、そのアイデンティティーに言及した段落があるのに対し、決定稿の方では「わたし」は名前も持たず年齢も不明で、いわば語り手以外の属性を付されていない。言い換えれば、『騎士デュパン』の語り手は、語り手=主人公という設定上、固有の体験を喚起しながら、同時に体験からその固有性を抜き去るような理論を描かなければならないという状況に陥っている。デュパンはテスト氏とは異なり、一定の属性を抱え込んだ自己の人生の姿をまず十分に語らなければならないのである。革命後フランスから亡命した騎士マリー・デュパン・デ・ドワネを父とし、クレオール人ロール・ド・ロルミを母とし、ニューオーリンズに生まれ¹⁰⁴、現在はどうかロンドンにいるらしい主人公は、こうした固有名詞を一挙に無に帰してしまうような抽象的な思想の力を語る前に、たとえばなぜ主人公は今ロンドンにいるのかといった素朴な疑問に答える物語を語らなければならない。したがって、もし『騎士デュパンの回想録』がこの設定のまま書かれていたとすれば、ロndonはその小説の中で何らかの役割を果たしていたと考えることができるのではないだろうか。そうだ

とすれば、その役割は、ヴァレリーが「ラ・シティー」で感じた熱狂とは無縁ではなかっただろうと思われる。

ヴァレリーは最終的に『騎士デュパンの回想録』の語りの構造も選ばなければ、ロンドンという固有名詞も削除する。しかし、ここで興味深いのは、『テスト氏との一夜』というこのあたう限り固有名詞が削られ、「任意の」空間が前面に出て来るテキストにおいて、テスト氏はどうやら「株式取引場で毎週ごく僅かな取引をして生計を立てているらしい⁽⁴⁹⁾」という設定がなされていることである。「かれはわたしに株式取引所の変動について話していた。その数字の長い行列がまるで一篇の詩のようにわたしの心を捉えていた。さまざまな出来事や産業界の動向、大衆の好みや大衆が熱中する対象をあれこれあげつらい、ふたたび数字をつきあわせてみるのだった。そして言うのだった。『お金は社会における精神のごときものだ。』⁽⁵⁰⁾」ヴァレリーは、金融街への興味を友人たちに語っただけではなく、この時期しきりに「お金と思考⁽⁵¹⁾」の関係を分析しようとしている。こうしてロンドンは、人と人とが金のやり取りをする空間としてテキストに取り込まれて行ったのではないだろうか。研究するよりはひたすらその熱気に浸っていた「知的陶酔」は、テスト氏においては、社会を「数字」に還元して一挙に捕えることの快楽へと変奏されたのではないだろうか。

ところで、上に引用した書簡では、ロンドンはもっぱら商取引という側面からのみ捕えられているが、この滞在中に書かれた『カイエ』には、ごく断片的にはあるが、都市そのものの姿への関心も緩られている。「次のものを研究すること。ガラス窓、地面、橋、錠戸——歩行——笑い、構造⁽⁵²⁾」。さらに、都市を構成する建築物のより理論的な分析——「あらゆる人間の作品の中には、石の目と木目、素材と成長の特殊性が残されている。その特殊性は組合せの中に隠れようとする⁽⁵³⁾」。この「金融街」la Cityとは幾分異なる「都市」la Cité そのものへの興味は、同年の『カイエ』の一節⁽⁵⁴⁾、さらに翌年の『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』では、「構築」というヴァレリーの鍵概念と結び付くことになる。この最後のテキストにおいて、ヴァレリーは「構築」という概念を建築という分野に限定した上で、その豊かさを理解するために「都市」を想像せよと語る。

一般に、建築は等閑視されている。劇場の舞台装置から貸家にいたるまで、ひとびとが建築について抱く意見は、まことに千差万別である。建築の普遍性を正しく評価するために、どうか「都市」の観念に依拠していただきたい。さらにその多彩に入り組んだ魅力を知るために、無数の外観を思いおこしていただきたい。建築物が動かずにいるのは例外の場合である。快楽とはつまり、自分が移動してついにはその建物を動かすまでになること、たえず変化する各部分が与えるすべての組合せをことごとく享受するほどまでになることなのだ。こうして柱は回転し、奥行きは流れ出し、回廊は滑り、無数のヴィジョン、無数の和音が大建築物

から抜け出してくるようになる⁽⁵⁰⁾。

こうして「ロンドン風の知的陶醉」は、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』では、ロンドンというこの世に存在する一都市を離れ、その後彼が繰り返し立ち戻ることになるヴィジョンにまで変容したことになる。つまり、構築されたものが形を失って流れ出し、形なきものが無数の組合せの可能性に従って構築されるのを見る眼差しが形成されたのである。もちろん、ロンドンはこの眼差しの形成を促した幾つもの契機のひとつに過ぎないが、それでも「都市」への関心を喚起したという点で一定の役割を果たしたことは確かだと思われる。

ヴァレリーがロンドンで垣間見た知的快楽は、以上のように、1895年の論文においては、不定形なものと構築されたものとの間を自在に行き来する運動と一体となる快楽に、1896年の小説においては、人と人との交流を支配する数字を辿る快楽に、それぞれ展開されることになる。

3. 群衆の人ポール・ヴァレリー

1896年3月29日曜日、まだベッドの中にいたヴァレリーは、ロンドンから送られて来た一通の手紙を受け取る。見知らぬ人物からのこの手紙は、仕事の依頼状だった。仕事の内容はパリで発行される雑誌のために英語の論文をフランス語に翻訳すること、条件は週給百二十五フラン、最低二週間は保証、仕事の開始は急を要し、出発は翌日の夕方、旅程は一等で行われること等が記されている。翻訳の対象となる論文については、「南アフリカの諸事件に関連するもの」とのみ記されている。受け容れる意志がある場合は電報で即答すること、その際「『承諾』、の一言で結構」⁽⁵¹⁾。

この手紙を受け取った当時、24歳のヴァレリーは、1894年にロンドン旅行を行った時と同様、これからの人生をどうやって送ったものか、依然はっきりとした考えを抱けずにいた。もちろん「カイエ」も規則的になり、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』も前年に発表され、彼にとって本質的な行為が何であるかという確信は次第に固まって来ていたと言えるだろう。しかし、将来に対する不安は相変わらずであり、物質的な面での境遇のもたらす危惧が知的な意志をしばしば脅かしていた。後にヴァレリーは、この時期のことを次のように回想している。

当時、わたしは、空虚であると同時に満たされ、閑暇であると同時に勤勉であるような奇妙な人生を送っていました。作品という点から見れば不毛です(というのも、わたしは自分のために幾つかのものを書く以外、何も書いていなかったのですから)。精神に関わる物事にわたしが抱いた関心の多様性、つまりはその移り気な広がりという点から言えばおそらくは生産的でした。この生活をわたしは自

分の好奇心の赴くままに、それが完全に自由に現れることができるようにと、そのことのみ捧げていたのです。もっとも、わたし自身の内部では、自分には連続性があると感じていたある筋道につねに従っていたのですが。ただし、その道がいったい自分をどこに導いて行くのかという点になると分かりませんでした。このそれ自体は甘美な独特の生活様式——そうです、それは甘美なものです、しかしここで理解してほしいのは、それが苦惱で出来ているということです——、そこには実生活という点から見れば深刻な不都合が多々ありました⁽⁵⁹⁾。

ヴァレリーは続けて、「わたしは自分が何者でもないことをあまりにも感じており、終いには将来一角の人物になることは自分には絶対的に禁じられているのだと信じるまでになっていました⁽⁶⁰⁾」と書いている。高揚すると同時に茫洋としているこの「独特の生活様式」を送るうちに、ヴァレリーは何かはわからないがとにかく人生を変えるような機会がないかと、「この停滞した人生を変える徴⁽⁶¹⁾」に対して虎視眈々となる。「わたしはベッドの足元に、常にトランクを置いていました。運命の指示が少しでもあったら行うつもりでいた出発のシンボルとして⁽⁶²⁾。」

チャールズ・ウィブレーにヴァレリーの名を教わったというリオネル・デックルなる人物から手紙を受け取ったとき、ヴァレリーは以上のような状況にあった。彼は即座に返答、翌30日月曜日、午後八時五十分、サン・ラザール駅発の列車でロンドンに向けて出発。「ぼくは一瞬も躊躇しなかった。だってこれはぼくが夢見ていたチャンスかもしれないのだから⁽⁶³⁾。」事態はすべて予定通り進み、ヴァレリーは火曜日の朝午前九時にヴィクトリア駅に到着、「ジュニパー」という名の「金髪の青年」の御す二輪馬車に乗って、依頼人のいるパーレイ・マンションズに赴く⁽⁶⁴⁾。ここで、ヴァレリーにとってのロンドンの第二主題、方向喪失のテーマが再び現れることになる。通された部屋は、黒人の使う道具で一杯になっており、「投げ槍と多かれ少かれ毒を塗られた矢がいたる所から突き出し、赤道地帯と多少なりとも関係のある写真で飾られ⁽⁶⁵⁾」ていた。

[...] わたしはこのアフリカの武器と装身具に囲まれて、いったい自分がここに何をしに来たのかを知りたいのだとじりじりしながら、随分ながい事待たされました。

もっとも、この一時停止と茫然自失の状態は、わたしにとっては馴染みのものでした。新しい室内装飾や自分の人生の中で新しい経験に出会うと、わたしの精神は驚き呆れ、月と知り合いになったのと同じくらい不思議に思って気を引かれ——あるいは茫然となって我を忘れるのです⁽⁶⁶⁾。

そこに現れる仕事の依頼者リオネル・デックルという人物、ヴァレリーが働くことになる「南アフリカ会社」、そしてその会社の創設者セル＝ローズについては、ここで

はごく簡略に基本的な事実を述べるにとどめたい⁶⁰⁾。南アフリカ会社は、1889年、セシル＝ローズによって設立、その際エルランジェ男爵を通して多額のフランス資本が投入される。セシル＝ローズは南アフリカのダイヤモンド業と金産業から独占的に得る富を背景に、1890年、ケープ植民地首相、1890年から93年にかけて中央アフリカを征服、自らの名を冠したローデシア植民地を建設する。そして、1895年12月、南アフリカ会社のジェームソンがトランスヴァールのヨハネスブルクに侵入、この拠点急襲は内外の激しい非難に曝され、ローズは事件への関与を否認するが翌1896年1月6日には首相の職を辞任。殊にフランスの批判は厳しく、同年1月5日の『ル・タン』紙は、イギリスはならず者を送り込んでフランスが南アフリカの鉱山に投下した巨額の資本を危険にさらしたと論じ、数日後には、紛争解決をドイツに期待するという論調を取る。こうした時代の流れにあって、南アフリカ会社はフランスの態度を軟化させるべく、フランスのマスコミに対して宣伝活動をする必要に迫られていた。ヴァレリーがロンドンに渡る三ヶ月前のことである。

ヴァレリーをロンドンに呼び寄せたリオネル・デックルは、ヘンリー、ウィヴレー、ジョージ・スティーヴンズと親交があり、かれらの雑誌『ペルメル新聞』Pall Mall Gazetteに狩猟家・収集家、さらには辛辣な政治評論家として論文を寄せていた。『ペルメル新聞』の執筆者たちは、またヘンリーと伴に『ナショナル・オブザーヴァー』にも協力しており、ソーホー地区ルーパート・ストリートにあった「ソルフェリーノ」というレストラン⁶¹⁾の常連でもあった。ヴァレリーは1894年にロンドンを訪れた際、「ソルフェリーノ」で何度か昼食を取り、ウィヴレーを通じてこの『ペルメル新聞』の面々に紹介されている⁶²⁾。その際、イギリスの対アフリカ政策やセシル＝ローズの人柄についての会話が交わされたものと推測されるが、1895年の「鴨緑江」にその間接的な反響が認められるほかは、再びロンドンに渡るまで、ヴァレリーはこの街の「ソルフェリーノ」的側面に特に強くは刺激されなかった様子である。

いずれにせよ、デックルを通じて「南アフリカ会社」に採用されたヴァレリーは、その日のうちからシティ地区、1894年に彼を夢中にさせたあの金融街のセント・スウィジンス・レインにあった事務所に通うことになる。ヴァレリーが配置されたのは広報課、新たな上司であるボーク氏と毎日三十分会って仕事の打合せをし、それ以外は彼のために設えられたデスクでただ一人トランスヴァールと南アフリカ関係の文書に取り組む。仕事が終わると、会社近辺のグリーンヴィル・ストリート十五番地に取った部屋に一人で帰宅。仕事においても私生活においても、ほとんど一人で過ごす生活が始まる。

この新生活についてヴァレリーが書いたものを読むと、94年の滞在の際に彼をあれ程熱狂させた知性の高揚する瞬間にせよ、方向を見失って茫然とする瞬間にせよ、かなり暗い色調を帯びていることが分かる。テーマ自体は変わらないが、ある転調が行われたのである。しかもこの二つのテーマは極端な形で交錯している。たとえば、シ

ユウォブ宛ての書簡で、ヴァレリーは新たな分野での活動を始めたと言っている——「ぼくは、自分にとって初めての政治研究のエッセーにまあまあ満足している。告白すると、以前ならこの分野での推論がこれほどまでに軽やかなものだったとは決して思わなかっただろうね [...]」⁶³」その一方で、ある種の崩壊感が語られることになる。

ぼくはここに君の大好きなデカルトを持ってきた、でもこの本を開いてはいない。今のぼくには、デカルトを何ものかに展開することはできないだろう。でも、デカルトがこちらを見ているのに気付くと、ぼくは精神はトランスヴァールから戻り——このふたつのものについて同時に考えることになる。「思考に陶然となって」と君はどこかに書いている。どんなにぼくもそういう状態になりたいことか。[...] 想像してみてください、ぼくは日に三十分ほど上司と会って仕事の話をし——それ以外の時間は一人だ、事務所の王様のようにね。仕事が終わってぼくの「南アフリカ」から外に出ると、ぼくは自分がばかになったのを感じる。まるでここで治療を受けているみたいだ。多分ぼくには沈黙、トースト、金鮎、そんな処方が出されたんだろう⁶⁴。

ジッドへの手紙にも同じようなコントラストが見られる。ヴァレリーはまず極度の緊張と疲労をジッドに訴えている——「説明のための会議、ディスカッション、指令といった時間を除けば、ぼくは一言も口をきかず、完全に一人きりで過ごしている。その後ぼくは同じようにして部屋に戻る、以前のあらゆる生活とあらゆる思考…技術的な思考以外のあらゆる思考から突然切り離された状態で⁶⁵。」同時に、この以前の生活パターンの入り込む余地のない環境、思考の対象から食事の時間、食べ物にいたるまで(「胸のむかつく栄養物——本当にひどいものだ!」⁶⁶)完全に異なった環境の中で、ヴァレリーは新しくかれの視野に収まることになった「南アフリカ会社」の政策とそこで働く人々への賛嘆の念をジッドに語っている。「彼らの力、深み、知恵、不意の明晰さといったことが君には分からないだろう。彼らはけっして間違えることがないのだ。ぼくには彼らのエチカが理解できる⁶⁷。」

このめまぐるしく交替する二つの主題のうち、方向喪失についてみれば、ヴァレリーがかなり深刻な状態に陥っていたのがわかる。彼はユイスマンスに宛てて次のように書き送っている。「夕方、ズボンを脱ぎながら、三秒間、自己について、その身体について、さらにはその終わりについて考えるやり方というものがある。その考え方は突然恐怖でうっとりさせ、次いで心臓を凍らせる。脳髓のあらゆる黒々とした広がり、その巨大で神秘的な仕事を続ける⁶⁸。」ヴァレリー自身の言葉を信じれば、彼はロンドンで自殺を試みようとしたという⁶⁹。人生そのものの方向=意味を見失ったのである。彼がどこまで真剣に自殺を考えたかという点は俄に断定できないが、後の回想においてこの滞在を二月の気候のひどい時だったと記憶違いしていることから、

かなり陰鬱な日々であったことは間違いない⁶⁶⁾。

こうした暗い日々を送る一方で、ヴァレリーはある知的高揚感に包まれてもいた。この1896年の「ロンドンの知的陶醉」はヴァレリーが偶然巻き込まれたイギリスの政治と不可分である。そのエッセンスは、一方では、「南アフリカ会社」の創設者にして不在の人物、セシル＝ローズに象徴されることになる⁶⁷⁾。ただし、ヴァレリーの思い描くセシル＝ローズ像は、それ以前のナポレオン神話への傾斜の延長線上にあり、「知性の力、意識の力が、そのもっとも複雑な姿で現れる物質的な世界の上に拡張されること⁶⁸⁾」を主眼としている。

そして、今やかれが行動するために行動し、ちょうど人が純粹科学に酔うようにして、純粹な行為に酔っているのが見られる。かれがこの情熱に焼けるように熱くなっているのが見抜かれる。この驚くべき力の浪費、広大な領地が自らの手のなかで形を変えるのを感じ、強力な思想のあたえる領域のなかを人々が行き来し、戦い、豊かになるのを認め、彼らがそれぞれの本能と気質の働きにしたがって、この壮大な賭博者が予想していた通りのことを成し遂げるのを見届けることで初めて満足するような驚くべき放蕩に、かれは情熱を注いでいるのだ⁶⁹⁾。

ヴァレリーは、ナポレオンについて「かれの導きの霊は組織化であり、そして組織化が政治において果たす役割は、構築が思考ないしは芸術において果たす役割とおなじである⁷⁰⁾」と書いているが、セシル＝ローズについても同様の視点から捕えていると言えるだろう。この人間の流れ、交通と戦争を統御し、予想される結果へと導く「純粹行為」が、24歳のヴァレリーを夢中にした「知的陶醉」である。

しかし、ヴァレリーの政治に対する関心は、このように知性のレベルだけで展開されたわけではない。より感覚的な認識、自分の置かれた歴史的な状況に対する感性を通しての認識が96年のロンドン滞在においては現れるのである。それは歴史的に限定されたある存在との出会いのなかで体験されることになる。群衆、というのがそれである。この出会いにおいて、ヴァレリーは主体性というものが解体される感覚を味わうことになる。つまり、方向を見失うという第二主題が歴史感覚に絡まり、不安と熱狂がないまぜとなって、ヴァレリーに苦い宿命感を覚えさせるのである。

わたしは、ロンドンで、無数の人間の群れに溶け込む感覚をおそろしく強く感じました。自分が多数の人々の流れの中であって完全にその任意の一要素に過ぎないのだという感覚を強く味わったのです。人々の流れは、無限にある道、ストランド街、オックスフォード・ストリート、さらには次第に霧にかき消され中空に浮かんでいるようにみえる様々な橋を渡って溢れ出し、地面の上で立てる足音の鈍いどよめきによって、わたしを陶然とさせたものです。この足音のどよめきが

わたしの意識に残した印象は唯ひとつ、わたしたちの運命の致命的な熱狂という印象です。わたしは従いました。目的もなく、疲労し果てるまで、この人間の流れに身を任せました。その流れの中には、無数の顔、無数の足取り、無数の私生活、それぞれの人間の自分は独自であり並のものではないという確信が溶け込んでいました⁷⁹。

こうしてヴァレリーは、比類なきものであろうとする個人の意志が、当人の置かれた「統計的な条件」によって打ち消されることを「苦くて奇妙な味のする快楽⁷⁹」をもって痛感する。「個人の量がわたしの特異性を消滅させていました。わたしは他から判然としない者となり、見分けのつかない者となりました⁷⁹。」このテキストはポーの有名な作品をすぐに連想させるが、ポーの「群衆の人」が「ふかい犯罪の典型にして権化⁷⁹」、つまり一人ではいられないという人間の本性の象徴であるのに対し、ヴァレリーにおいては、「群衆の人」は歴史によって課された条件、つまり数が個性を消滅させるという事態を体現した存在であるという点に注意したい。「ある一定の時期に、巨大な諸都市の運動は、唯一無二の人間の増殖という驚異的な不安感をうみ出した。人々はある種の嫌悪と強い脅えの感情を込めて、かけがえのない個人が無数にいることを実感している⁷⁹。」もちろん、群衆それ自体は十九世紀末を待たなくても存在していたわけだが、この時期、群衆は新たな歴史的存在としてヴァレリーにかぎらず様々な人々の注目を浴びていたのである。

スザンナ・バローズによれば、テーヌの『近代フランスの起源』(1876年-1894年)と、ゾラの『ジェルミナル』(1885年)によって、1880年代半ばには、群衆はごく一般的な話題となっていた。さらに80年代からの四人の社会学者、シゲール、フルニアル、タルド、ル・ボンの活躍によって、テーヌの資料とゾラのヴィジョンは理論化されて行くことになる。殊にガブリエル・タルドは、『模倣の法則』(1890年)や『刑法の哲学』(1890年)によって、フランス革命やパリ・コミューヌを扱った「右派の歴史家たちの物語を群衆の心理学に移し替える」。また、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆の心理学』(1895年)の成功は、この新たな学問を世界中に普及させることになった⁷⁹。

ヴァレリーがある程度までタルドの説に通じていたことは知られている⁷⁹。また、『カイエ』には、先行する三人の説を取り込み群衆の心理学を通俗化したル・ボンの説に言及したノートが見られる⁷⁹。さらに、アンリ・マゼルの『社会の相乗作用』(1896年)を読むことによって、ヴァレリーはこの当時話題のテーマに触れていたことも確認できる⁷⁹。こうしてヴァレリーは群衆、ことに個人というものを終わらせるものとしての群衆への関心をはぐくんで行く。そして、この関心は、ある思いがけない事情によって新たな理論的な次元を獲得することになる。個別性の消滅という方向喪失の体験は、ロンドンの群衆のなかを彷徨い歩くといういわば感覚的なレベルでの体験でもあったわけだが、ヴァレリーは1896年という年代とロンドンという土地とが背景となってい

るその事情をきっかけに、感性による認識を理論的な状況認識に変えてしまうのである。

1896年の滞在の際、ヴァレリーは1894年にロンドンを訪れた時ほど文人たちに会っていない⁽⁶⁰⁾。イギリスの文壇の様子もまた、様変わりしていた。オスカー・ワイルドは男色罪で1895年から二年間投獄、『イエロー・ブック』、さらには『サヴォイ』といったデカダンスの雑誌は廃刊。また、ヴァレリーはメレディスからの電報を受け取っており、一度は彼に会ったものとみられるが、メレディスは植民地政策への強硬な反対者であり、セシル＝ローズを批判していた。会話はあまりはずまなかったのではないかと推察される⁽⁶¹⁾。こうしたなかであって、ウィリアム・ヘンリーとの再会は、その後のヴァレリーに例外的な活動の広がりをあたえることになった。

マラルメが、「かれがライオンの顔をしているのを見ることになるだろう」と語っていたこの人物は⁽⁶²⁾、彼が編集する『ニュー・レヴュー』にウィリアムズが「メード・イン・ジャーマニー」というタイトルで発表したドイツの脅威に関する一連の論文に触れ、これについて「フランス風の、哲学的結論のようなもの⁽⁶³⁾」を書かないかとヴァレリーに要請する。1895年から開始されたウィリアムズの諸論文は、当時イギリスで大きな話題となり、南アフリカにおけるドイツ勢力の増大だけではなく、経済においても大英帝国がドイツによって脅かされていることを英国国民に自覚させる役割を果たしたものである。

このヘンリーからの依頼によって書かれたヴァレリーの論文は、「ドイツの制覇」と題されて『ニュー・レヴュー』1897年1月号に掲載、この題名は後に「方法の制覇」と改題されることになる。論文中、ヴァレリーはドイツの成功がなによりもシステムティックな方法の適用によること、さらに「完璧な方法の適用がすぐれた人間を時代遅れのものにすること⁽⁶⁴⁾」を指摘している。

方法は、個人が紛れもない凡庸さそのものであることを必要とする。あるいはむしろ、忍耐強いこと、あらゆるものに見境なく熱狂もせずに注意を払うことといった、もっとも初歩的な才能だけを崇高なまでに持ち合わせていることを要請する。この点が認められれば、対象となる個人を、どのようなすぐれた人間にもかなわぬ者につねに必ず仕立てあげることができるだろう⁽⁶⁵⁾。

こうして「方法」は、「個人の終わり⁽⁶⁶⁾」を画することになる。英雄の時代は過ぎ去り、「これらのすぐれた個人が見出したあらゆるものなかで人々が記憶に留めるのは、模倣可能なものだけ——模倣されれば凡庸な後継者の手段を増加させるものだけである⁽⁶⁷⁾」。そして、イギリス人やフランス人には欠けている特質、「規律」に従うという特質を備えたドイツ、イタリア、日本が今後の脅威となるだろうとヴァレリーは語る。しかも、これはまだ方法というものの始まりに過ぎない。あらゆる可能な場合へ

の回答を含み、創案の努力を大いに軽減する方法といものは、政治、軍事、経済、科学といった分野だけではなく、形而上学、芸術、文学、科学の先端部分といったまだ例外的な人物の才能によって保証されているかにみえる分野をも制覇するのではないか。やがては「地上のあらゆる凡庸さが決定的な勝利」をおさめ、「あらゆる物事において、方法がすぐれた個人というものを大いに節約させることになるのではなかろうか」。ヴァレリーはこうしてまだ明らかにはされていない「理論の理論」、「思考術」の探究の可能性を素描してみせる。

けっきょく、ヴァレリーの目からみれば、それぞれの個人の独自のものであるという確信、あるいは独自のものになろうとする意志は、二重に脅かされていたのである。ひとつは、個人の置かれた統計的な条件、その圧倒的な数が個人の特異性など埋もれさせてしまうということ。もうひとつは、個体の独自性を求めず従順に方法に従う人間が勝利する方向へと時代が進んでいること。こうしてヴァレリーは、群衆の人となって自己の特異性が解体される感覚そのものの書くと同時に、群衆を離れ、それが向かいつつある方向を分析する理論を書くことになる。ロンドンという街は、ヴァレリーに方向を見失わせる一方で、知性の可能性を極限まで追求しようとする情熱をかき立てるのである。

4. 英語とヴァレリー

群衆に対する態度のうちに見られるように、ヴァレリーにおいては、知性が高揚して陶然となる瞬間と方向を喪失して茫然となる瞬間とは、ある地点においては見分けがつかなくなるのではないかと思われる。というより、ある共通の源泉があって、そこから見れば、これまで便宜的に使い分けてきた知的快楽と方向喪失は同じ瞬間の異なった現れであると見做すことができるのではないだろうか。

あくまで仮説に過ぎないものの、それでもヴァレリーのテキストからこのふたつの瞬間が出会う地点を見極めることは可能だと思われる。そのために、ここでちょっとした迂回を試みることにしたい。ヴァレリーがロンドンに行くという時点で誰も頭を掠めたにちがいないが、今まで問題にして来なかった疑問をここで検討してみたいのである。つまり、ヴァレリーはどの程度まで英語を使いこなせたのだろうか。

始めに、関係者の証言から検討してみよう。エドメ・ド・ラ・ロシュフーコーによれば、ヴァレリーの息子の一人は次のように語っていたという。「彼は英語を知っていた、しかしそれを理解してはいなかった⁽⁸⁾」。乱暴に要約してしまえば、少しは英語を知っていたがあまりできなかったということらしい。タイピストとして自身ヴァレリーの側で働いていたド・ラ・ロシュフーコーは、もっと具体的に証言している。「ヴァレリーは英語で書かれたものを読んだが、この言語を話すことはまずなかった。読んでいるものは理解していたが、耳にするものはおそらくそれほど理解していなかっ

た。いずれにせよ、英国人の中で会話が交わされている時に、その会話に加わることはほとんどなかった⁹⁰⁾。」アガート・ヴァレリー・ルアールはヴァレリーの英語力を積極的に評価していて、彼が自在に英語を話したと証言している。ただし、これにも譲歩はあって、「筆を手にする時の方がもっとのびのびとしていて、シェイクスピアやラファエル前派主義のダンテ＝ガブリエル・ロッセッティの詩を何編か翻訳したり、さらにはもっと後に雑誌『アテネウム』から注文を受けてアインシュタインの一般相対性理論について論文を書いていた時の方がより自在でした⁹¹⁾」、と付け加えている。以上、評価に多少のばらつきはあるものの、周囲にいた人間からみれば、ヴァレリーは読み書きについてはそれなりに出来たが、英語を聞き話すことに関しては縦横無尽というわけにはいかなかった様子である。

こうした周囲の見方は、ヴァレリー自身の英語に対する意識からそれほど隔たったものではなく、「わたしは英語を話し、聞くことがとても苦手です。殊に、大衆の話す英語となるとお手上げです⁹²⁾」と自ら語っている。さらに、イギリスの思い出はどれをとっても素晴らしいものばかりなのに、ただひとつだけ胸の痛むことがある、とも述べている。「それは、英語で自分の考えを表現したり、あるいは人々が話している英語を聞き取ったりするのに、一種の無力感のような救い難い感じがあることで、その無力感を克服することはついにできませんでした⁹³⁾。」

話がここまでならば、これまで繰り返し強調してきた方向喪失のテーマの一ヴァリエーションのひとつとして指摘しておけば済むかに見える。つまり、ヴァレリーはそもそも人生の方向を見失ってロンドンに辿り着いただけではなく、ボックスヒルの停車場では歩き出すべき道がわからずに一種のカタレプシーに陥り、デックル宅ではかつて見たこともなった室内装飾に茫然となり、彼自身の言葉を信じれば生き続ける意志を失って自殺しかけ、さらには周囲で話される言葉の意味も完全には理解できなかった。こうして、方向性の喪失はさまざまなレベルでヴァレリーのロンドン体験を貫いていたのだ、と。

しかし、ここで興味深いのは、ヴァレリーがこのなんとも言えない無力感に苛まれる言語、母国語ではない言語を使うという体験の内部に踏み込み、その感覚を言葉にしていることである。ただし、その言葉は1896年のロンドン滞在中、マルセル・シュウォブに宛てて書かれたものであり、後年のある種の余裕をうかがわせる回想とは異なり、無力感ではなくひとつの新しい感覚を発見した喜びとして語られている。

ヘンリー宅では、1894年に初めて来た時にくらべて気持ちにゆとりがあった。ウィブレーはぼくが英語でうまくやっているのを聞いて茫然としていたよ——ぼくもびっくりしたけどね。おもしろいのは、英語だときわめて道理にかなった考えしか浮かばないということだ——それに知っている単語に沿ってしかものが考えられない…⁹⁴⁾

この視点、つまりフランス語ではなく英語で話し考えると思考の流れが随分変わったものになる視点は、1903年の『カイエ』の一節ではさらに展開されている。けっきょくのところ、とヴァレリーは考える、母国語でものを考えている時も思考は同じような制限を受けているのではなからうか。

「外国人の女」——「奇妙さ」——フランスに暮らし——フランス語を話す——一人の外国人の女の描写——

すべてが変わる——ベッドからさまざまな色に至るまで——朝食——美術館！
自国語ではない言語を話す女ないしは男の心理——辞書が限られているために——彼はしまいには自分で翻訳できるような思考しかしくなる。

このことは、自身の言語を使っている時も見えない形で行われているのだ——
ひとは自分で話せることしか考えなくなる傾向がある⁹⁹。

ここまで来れば、外国語を話す感覚というテーマが、言語と習慣を徹底的に批判してあるがままのものを見ようとする彼の主要な営みに連なっていたことが理解されよう。「存在するものを見ること¹⁰⁰」はたやすいことではない。なぜなら、「ひとは知覚する習慣のないもの——知覚したくないものを知覚しない¹⁰¹」からだ。そこから、予想されるものしか見ないこと、概念によってしかものを見ないことの批判が展開されることになる。ヴァレリーは、この批判を1895年の『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』からシステマティックに行っている——大部分の人々は、純粹に眼に映るものではなく、それが表す概念しか見ていない。眼には世界の無数の色彩、質感、その変化が映し出されているのに、多くの場合、それらは気づかれずに終わる。概念は変化しないからである。「彼らは自己の網膜によってよりも、むしろ自家用の用語辞典にしたがって知覚するのである¹⁰²」。

この習慣的なものの見方を破り、世界の持つ多様性にむかって開かれるために、ヴァレリーは理解しないということ、「理解しないというこの大なる不幸——あるいはその逆の喜び¹⁰³」の重要性を繰り返し強調することになる。「用語辞典」が情性的に課す認識から開放され、思考の可能性を押し広げるためには、目にするものを理解しないということが基本的な態度となるのである——『「自我そのもの」は、形成期を経て1910年には成熟を迎えるのであるが、その方向へのわたしの第一歩のひとつは、1892年の発見、つまり理解に関する問題が明確に提示された時——われわれが理解しないあらゆる状況が惹起する興味が広大なものであるということの発見であった。充分に調査され、明確にされた理解しないということは、まるで掘り出し物のように、活動と明晰さを引き起こすはずである¹⁰⁴。』

そこからヴァレリーの「奇妙な眼差し¹⁰⁵」、目にするものだけではなく、存在の属性

までも無縁のもののみならず独特の視力がヴァレリーのエクリチュールのある本質的な部分を構成することになる。たとえば、1894年2月26日付けジッド宛て書簡で語られる「存在の感覚⁽¹⁰¹⁾」、さらには1900年の『カイエ』の「ぼくは存在の奇妙さを味わう——それは陶然となる苦さだ⁽¹⁰²⁾」という一節、これらは思考が定点を失い、理解するために必要な指標を見失って、むき出しになった存在そのものと対峙する瞬間を述べたものである。「奇妙さは真のはじまりだ。はじめに奇妙なものありき⁽¹⁰³⁾。」「カイエ」においても、生前発表されたテキストにおいても、この「奇妙な眼差し」に関するものは無数にあるが、典型的な一節だけを引用してみよう。

〔…〕わたしの中には、あらゆる人間的な事物に無縁な者がいる。かれはいつでも自分の見るものを何ひとつ理解せず、すべてのものを独自のもの、珍しいもの、局部的かつ恣意的に形成されたものと見做す準備が来ている。わたしの国にせよ、わたしの言語にせよ、わたしの人生にせよ、わたしの思考にせよ、わたしの容姿にせよ、わたしの来歴にせよ、偶発的、断片的なものであり、無限の可能性の中から——見本のようにして——抜き出されたものであると、わたしが日に何度も思わないようなものは何ひとつない⁽¹⁰⁴⁾。

ヴァレリーが、彼にとって思考活動の本質をなしている「構築」に向かうのは、この決定的な意味を担ったものが何ひとつ存在しない地点からである。例えば、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』では、人間の微笑を構成しているものをファサードや庭の起伏にあしらうといったように、事物を貫いて交錯する波動を見抜き眼差しをもち、その波動が可能にする無限の組合せを次々に実現して行く精神が語られる。また『カイエ』においては、主要ではあってもあくまでもその一面に過ぎないと断った上で、夢、覚醒時、明晰さ、情熱、感情、推論、信仰といった心的活動のさまざまな変転を同じ幾つかの機能の組合せで人工的に作り出す「化学」が企てられていることが指摘できよう⁽¹⁰⁵⁾。ヴァレリーにとって、理解するということは、対象を別の記号に置き換えることではなく、習慣的な見方を解体されて不定形になったものを、自ら選んだ視点と自ら規定した操作によって分析し、その対象を再構築することによってはじめて完了する行為なのである⁽¹⁰⁶⁾。だからこそ理解しないということが、目に映るものをすでに知っていることに還元しないことが重要なのである。

同時に、この「奇妙な眼差し」は、構築へと向かう契機となるだけではなく、はじめて見ることの官能性をヴァレリーに啓示することにもなる。慣習的な見方に従って世界をすでに知っている何かとしてしか捕えることができない日常感覚が崩れ去り、眼にするものが奇妙で名づけがたい、独自のものとして現れる瞬間を、ヴァレリーは繰り返し描き出す。たとえば、「わたしはノートル・ダムに遭遇した」とヴァレリーは書く。「つまり、だしぬけにノートル・ダムが未知の物体として、——それ以前にはわ

たとえ少しも関係のなかったものとして——わたしの前に現れたということである⁽⁹⁹⁾。そして、ヴァレリーはその奇怪な姿、特異な存在感を描くのであるが、この記号によって了解されなくなった世界の姿もまた、構築と並んでヴァレリーのエクリチュールの重要な極を成していると言えるだろう。

しかし、「奇妙な眼差し」は両義的である。一方でそれは知性と感性とが一体となった陶酔へとヴァレリーを導くのだが、その一方でそれは意識が麻痺するほどの強い不安へと彼を陥れることにもなる。これも典型的なテキストだけを引用してみよう。

人間は奇妙さのなかに埋没した監視所にはかならない。

突如として、人間は無意味のなかに、比較できないもののなかに、不合理なものなかに沈められていると気づく。すると、すべてのものが、かれには果てしなく無縁で、恣意的で、同化できないものに見えてくる。かれの前にある自分の手が、かれには奇怪なものに見える⁽¹⁰⁰⁾。

この「麻痺症状に近い状態⁽¹⁰⁰⁾」にとどまる限り、眼差しはなにも見分けることのできない末期の眼に近づく。「事物にそそぐ奇妙な眼差し、この認知することのない人間のこの世の外にある眼差し、存在と非存在との境界にあるこの眼差しは、思索するひとのものだ。それはまた、臨終の者の、認知する力を失った人間の眼差しでもある⁽¹⁰⁰⁾。」こうして陶酔から構築、茫然自失から麻痺へといたるある広大なテキストの場がわれわれの前に開示されるのだが、これは理解しないということ、思考を情性に変えるようなごく限られた数の認識の仕方に一致するからといってその対象を知っているとは思わない、という態度がつくり出す空間なのである。

われわれはロンドンの話を忘れていたわけではない。知的陶酔と方向喪失は、このヴァレリーが後に展開する「奇妙な眼差し」のエクリチュールにおいて同じ地平線上のものとなるのではないかとわれわれには見えるのである。いずれも予見する力を奪われた眼差しであり、そこから向かう方向は構築、陶酔、茫然、自殺とさまざまだが、習慣的な認識から逃れた地点での体験であるという点是不変である。もちろん、その眼差しがロンドンで形成されたというのではない。例えば、1889年の『ありそうな話』の中で、ヴァレリーはすでに自殺を決意した青年の目に映るかつて見たことのない世界の姿を描いている。しかし、記号の集積ではなくなった世界をあるがままに見る眼差しは、ロンドンという街に触れることで強化され、自覚され、彼の書くものの中に取り込まれて行ったのではないだろうか。ロンドンという街はそうにしてヴァレリーにある確固としたエクリチュールの場を啓示したのではないだろうか。

ヴァレリーはロンドンに死に場所を探しに行った、というルヴァイヤンの説⁽¹⁰¹⁾は極端と思えるが、彼がフランスの外に出て、人生においてもエクリチュールにおいても(少なくとも84年に関しては)行き詰まっていたそれまでの連続性をいったん断ち切る

必要性を感じていたことは確かだと思われる。そして、ヴァレリーがその「外」で出会ったものは、茫然自失の状態から死を垣間見るにいたるまでの方向喪失の体験と、はじめて見ることの官能性から構築の熱狂へといたる知的陶醉の体験であった。さらにこのふたつの瞬間を自在に捕えることができるような眼差しを得ることで、以後のヴァレリーのエクリチュールの展開が準備されたと見ることはできないだろうか。言うまでもなく、ロンドンへの旅は、あくまでも若年期のさまざまな出会いや出来事のひとつに過ぎない。マラルメやロヴィラ夫人との出会いに比べれば、重要さのランクが幾分落ちることも事実だろう。しかし、自らの精神史の展開を振り返るとき、ヴァレリーはこの街のことを忘れていない。ロンドンとの出会いは、ヴァレリーにとって何かではあったのである。

1896年4月16日、上司ボーク氏からの手紙によって、ヴァレリーは「南アフリカ会社」から解雇を通知される。「マタベレの状況が今後イギリスのマスコミの注目を一身に集める模様である。故に、われわれの文書から翻訳用の資料をすぐに得ることはないだろうと私には思われる。よって仕事のある可能性があまりないのだから、貴君がこの地に居続ける価値はないと私は考えるものである⁽¹¹⁾。」マタベレ族がローデシア南部で蜂起、そのニュースがジェームソンのヨハネスブルク侵入に端を発した南アフリカ政策問題をマスコミに忘れさせるというのである。こうしてヴァレリーはイギリスでの職を失う。奇妙な形で歴史に翻弄されたことになる。

ヴァレリーは、状況さえ許せばそのままイギリスに留まることも考えていた——「わたしはイギリスの生活になじんでいました。そして、文学的な野心というものをまるで持ち合わせていなかったの、心の糧と生計の資が見出せる所であれば、どこにでも住むことができたのです⁽¹²⁾。」また、ロンドンに着いた当初、ヴァレリーはジッドに次のように書き送っている。「ぼくは多分一ヵ月後にはモンペリエにいるだろう。でも、本当にそうだろうか。その時ぼくはプレトリアにいるかもしれないし、ローデシアにいるかもしれないのだ⁽¹³⁾。」ヴァレリー・ラルポーの証言によれば、ヴァレリーは「この時期、もし一人の政治家がわたしを捕らえていたら、わたしはおそらくその経歴を歩んだことでしょう…」と語っていたという⁽¹⁴⁾。しかし、それらの可能性はいずれも可能性のままで終わり、なお、一定の期間ロンドンに留まった後、ヴァレリーはフランスに帰国。この年の夏、モンペリエで『テスト氏との一夜』を書き上げることになる。

エピローグ

ヴァレリーが再びロンドンを訪れるのは、1922年になってからのことである。1896年から数えて、二十六年の歳月が流れたことになる。22年に訪れてからは、23年、27

年と続けてロンドンに旅しているが、この27年のロンドン滞在中、ヴァレリーは1930年に発表されることになる「ロンドン・ブリッジ」という散文詩の原型を『カイエ』に書き留めている¹¹⁹。

このテキストを読むと、少なくともロンドンに関しては、ヴァレリーの時計は1894年と1896年の間で止まっていたのではないかと思われる。見るという快楽に浸ること、どれも同じ形をした砂の流れのような群衆を背後に感じること、生きる人々の世界から突然切断されたような感覚を覚えること、そして世界が慣習的な、記号によって了解されるものから突如として解き放たれた時にあらず姿に陶然と見入ること。欠けているのは、初期の『カイエ』に特に顕著な構築への意志、機能的な側面から分析することによって思考の法則とその限界をあきらかにしようとする意志である。このことは、逆に、これからヴァレリーの初期のテキストを読み直していく際、あまりにも機能的な視点からのみ捕えることの危険性をも示しているのではないだろうか。初期のテキストにはもっと別の可能性がはらまれているのではないか。これは今後の課題である。

もちろん、時は流れたわけだし、「ロンドン・ブリッジ」には、とてもこれまで論じて来たことだけでは汲み尽くせない要素がある。特にヴァレリーが草稿において「無限の瞬間¹²⁰」と呼んでいるものは、それだけを論じるためだけでも別の場所が必要となるだろう。そこで、ここではこの散文詩の分析のようなものを展開するのはあきらめることにして、ここまで論じてきたロンドン体験のエッセンスをヴァレリー自身に語ってもらい(かなり長い)、論を終わることにしたい。

一人の通行者が突如放心状態にとらわれ、かれの内部でかくも深い変化がなされるということがどうして起こるのだろうか。ほとんどすべて記号でつくられた世界から突然転落して、ほとんどすべて意味で形づくられた世界に陥るということがどうして起こるのだろうか。この通行者にとっては、あらゆるものがそれが普通持っている効果を唐突に失い、自分の姿をそのなかに認めることを可能としていたものが消滅しようとしている。もはや略号はなく、事物の上にはほとんど名前もない。ごく通常の状態であれば、われわれを取り巻く世界は符号と掲示に置き換えて役に立つものにするのできるというのに。君にはこの矢印と文字の世界が見えるか…ワレワレハソノナカデ生キ動イテイルノダ。

ところが、ときとして、定義しがたいある熱狂によって、われわれの感覚の力がわれわれの知っているものを凌駕することがある。知識は夢のように霧散し、われわれはいわばまったく未知の国の純粋な現実の内奥そのもののなかに置かれるのだ。未知の言語が話されるまったく未知の国にいるかのように、この言語はわれわれにとっては、響き、リズム、音色、抑揚、聴覚の不意打ちといったものにすぎなくなるだろう。事物が突如として人間的習慣的なすべての価値を失い、

魂がただ眼に映るものの世界にのみ属するときも、またそれと同様である。このとき、限界はあるが尺度はないある時が持続するあいだ(というのも、あったもの、あるであろうもの、あらねばならぬもの、こうしたものはむなしい記号でしかないのだから)、「ロンドン橋」の上に存在すると同時に不在でありつつ、わたしはわたしがあるところのものであり、わたしはわたしが見るところのものである⁽¹⁷⁾。

1991年1月12日

註

- (1) *Cahiers 1894-1914*, 1899, III, 468. なお、ヴァレリーは1894年のロンドン旅行を1892年、1896年4月のロンドン滞在を同年2月のこととしている。前者は『カイエ』の編者がノートで指摘しているように、パリに上京した時期の思い違いに端を発する誤りとみられる (*Ibid.*, p.612, note 1 de la page 468)。後者の記憶違いについては後で触れることにしたい。また、『カイエ』からの引用は、完全版が刊行されている部分については完全版から、それ以降(CNRS版第二巻67頁以降)についてはCNRS版から行う。
- (2) C, 1905, III, 466.
- (3) Cf. C, 1926, XI, 443: 「ロンドン、ジェノヴァ——わたしが魅惑された街。」
- (4) C, 1923, X, 5.
- (5) Cecily Mackworth, *English Interludes: Mallarmé, Verlaine, Paul Valéry, Valéry Larbaud in England, 1860-1912*, London and Boston, Routledge and Kegan Paul, 1974, pp. 124-154. なお、彼女の研究に依拠し、1896年のロンドン滞在だけを扱ったものに、Benoît Peeters, *Paul Valéry, une vie d'écrivain? Les impressions nouvelles*, 1989, pp.61-67がある。

また、彼女が中心的な資料として扱っている Paul Valéry, "My early days in England", *Bookman's Journal*, December 1925 は、この小論を執筆する段階で参照できなかった。その代わり、ここではパリ国立図書館の草稿部に保存されている、"Earlier visits to England", *Conférence I*, BN ms, ff.88-103. に依拠することにした。これは題名のみ英語で、本文はフランス語のタイプ原稿である。ページの最後の単語を次のページの冒頭で繰り返すヴァレリーの個人的な癖 (ff.95-96; ff.96-97)、タイプライターがうまく作動しなかったのかひとつのスペースに複数の文字が打ち込まれた箇所が幾つかあること、何ヶ所かで単語と単語の間にスペースを設けていないこと等若干の問題はあるにせよ、ほぼ完成原稿に近い状態のテキストと見做すことが可能と思われる。ただ、編纂者がタイトルに続けて「講演か? 1925年頃」と注記しているように、テキストの性格および成立

年代は確定されていない。しかし、マックウォースがイギリスで発表されたテキストから引用している箇所(英文)、さらにはこのテキストを典拠として見られる箇所が、ほぼ完全に国立図書館のテキストに対応していることから、後者は前者の元原稿と推定することができるのではないだろうか。ただし、残念なことに、マックウォースは“My early days in England”の本文自体が英語なのか、それとも元のテキストはフランス語であるのか、英語であるとすれば誰の手によって翻訳されたのか、またどういう経緯でこのテキストが発表されたのか(つまり元になる講演があったのかどうか、はじめから依頼原稿であったのか)といった点について明らかにしていない。いずれにせよ、タイトルにみられるヴァレリーの英語が、より英語のイディオムに適った表現に訂正されていることから、草稿のタイプ原稿とイギリスの新聞に発表された原稿の間では一定の作業が行われており、その過程で誰かの手が入られた可能性がある。

また、“Earlier visits to England”には、1922年のロンドン再訪を「最近の話」として言及している箇所があること(f° 103)、“My early days in England”の発表が1925年であることから、執筆時期はこの間のことと推定される。ちなみに、ヴァレリーは1922年と1923年にロンドンを訪れた後、1927年までこの地に戻っていない。以下の引用では、“Earlier visits to England”をEVと略記、その後マックウォースの論文中の対応するページ数を併記することにしたい。

- (6) Jean Levaillant, *Genèse et signification de «La soirée avec Monsieur Teste»*, thèse de doctorat dactylographiée, Paris IV, 1966, pp.186-188 et pp.257-264.
- (7) 出発日については、OE I, p.22を参照のこと。いつロンドンから戻ったのかという点は、1894年6月30日付けのアルベール・モッケル宛て書簡からの推測:「親愛なるモッケル君、ぼくの方は昨日ロンドンから船でついたところだ」(*Lettres à quelques-uns*, Gallimard, 1952, p.49)。ヴァレリーがロンドンからジッドに宛てて書いた手紙(*Correspondance Gide/Valéry*, Gallimard, 1955, pp.205-206)の日付、1894年7月9日は、それが書かれた日とは正確に対応していないのではないかと思われる。この点については註(30)で検討することにしたい。
- (8) *Lettres à quelques-uns*, pp.52-53。ちなみに、ヴァレリーが片思いしたり、実際に付き合ったりした女性名のリストに、ロヴィラ夫人とサーカスの騎手パチルドに挟まれる形でピネッタの名前が書かれている(*Cahiers 1894-1914*, 1899, I, 312)。
- (9) Lettre à Gide, 25 mai 1894 (*Correspondance Gide/Valéry*, p.203)。なお、間接的な証言として、1894年6月9日付け、シャルル・オジリオンへのフルマン宛て書簡(*Paul Valéry Bibliothèque Nationale*, 1956, p.20 [n° 112])がある。これによれば、ヴァレリーは「ロンドンを再び見たいという抑え切れない欲望」を感じていたらしい。ちなみに、ヴァレリーは七歳の時にロンドンを旅行しているが、この旅

行については、英仏海峡を渡る時に旧式の船の中でおそろしく船酔いしたこと、マダム・タッソーの蠟人形館で心底脅えたこと、ズッペのオペレッタ『ファンタニッツァ』を聴きに行ったこと——この三つが記憶に残っていると記している (EV, f° 89: Mackworth, p.128)。なお、この家族旅行について、ヴァレリーは、フレデリック・ルフェーヴルとの対談では単にロンドンに行ったという事実のみ (Frédéric Lefèvre, *Entretiens avec Paul Valéry*, Le Livre, 1926, p.13)、ヴァレリー・ラルボーに対してはマダム・タッソー館のこのことのみ (Valery Larbaud, *Fauteuil XXXVIII, Paul Valéry*, Félix Alcan, coll. «Les Quarante», 1931, pp.13-14; repris dans *Ce vice impuni, la lecture: Domaine français*, Gallimard, 1941, renouvelé en 1968, p.259) を語っている。

- (10) EV, f° 89. Cf. F. Lefèvre, *op. cit.*, p.14: 「わたしはロンドンがととも好きでした。マラルメはロンドンのことをきわめて魅力的な街だと言っていました、まさしくその通りです。」
- (11) Cf. Lettre de Stéphane Mallarmé à Méry Laurent, 5 mars 1894: 「わたしはこの古いロンドンの街をととも愛していました [...]」 (S. Mallarmé, *Correspondance*, VI, Janvier 1893- Juillet 1894, Gallimard, 1981, p.238)。また、同書 p.239 も参照のこと。
- (12) 他にヴェルレーヌ、また親英派として知られていたポール・ブルジュエの影響を挙げることができるだろう。マックウォースが、この世紀末のロンドン・ラッシュの諸相を詳しく研究している (Mackworth, *op.cit.*, pp.124-127)。
- (13) C, 1940, XXII, 842.
- (14) Lettre à Albert Thibaudet, 1912 (*Lettres à quelques-uns*, p.95).
- (15) Lettre à Mme Mallarmé, 15 septembre 1898 (citée par Judith Robinson - Valéry, "Mallarmé, le «père idéal»", in *Littérature*, n° 56, 1984, p.108.
- (16) C, 1913, IV, 908.
- (17) Lettre à Albert Thibaudet, 1912 (*op.cit.*, p.108).
- (18) S. Mallarmé, *Correspondance* VI, *op.cit.*, pp.226-227; pp.238-242 を参照のこと。なおこの時の講演は翌年増補して刊行されるが、原型は1894年4月に発表されている ("Lecture d'Oxford et de Cambridge: La Musique et les Lettres", in *Revue Blanche*, n° 30, 1894, pp.297-309; *OEuvres complètes*, pp.643-654)。ヴァレリーは同年5月25日付けジッド宛て書簡で、「オックスフォードかケンブリッジのポート部の学生たち」を主人公とした青春ドラマの構想を書き送っているが、その発想の背景のひとつにこのマラルメの講演旅行があるのではないだろうか。
- (19) ヴァレリーがいかに熱心に「火曜会」に顔を出していたかは、例えばマラルメの1894年5月14日付けアンリ・ド・レニエ宛て書簡 (Mallarmé, *Correspondance* VI, *op.cit.*, p.267) から伺える。この書簡中マラルメは翌日の「火曜日」夕方家にいないことを告げ、このことを「グリファン、ヘローあるいはヴァレリーに

会ったら、一言言っておいて下さい」とレニエに依頼している。

- (20) *Lettre à Gide, 26 février 1894 (Correspondance Gide/Valéry, p.199).*
- (21) *Ibid.*, p.198.
- (22) B. Peeters, *op.cit.*, p.40 を参照のこと。
- (23) *Lettre à Gide, 26 février 1894 (op.cit., p.198).* 恒川邦夫氏は、当時のヴァレリーを「詩人の極」、「生活者の極」、「思考する私の極」の三極から分析、その三極のせめぎあいがこの時期の特色であるという独創的な見解を提示されている(『「テスト氏」論のためのメモ』、『一橋大学研究年報:人文科学研究』25、1986年、3-33頁)。
- (24) *EV, ff. 90-91: Mackworth, pp.129-130.* なお、松田浩則氏が、「散歩者」ヴァレリーの姿をパリとの関連で論じられている(“Valéry ou Rêverie du promeneur sauvage”, in *Revue de Langue et Littérature Françaises*, n° 3, 1989, pp.159-175)。
- (25) *EV, f° 91: Mackworth, p.130.*
- (26) *EV, f° 90: Mackworth, p.134.* ただし、シュウォブ自身はこの時までメレディスには会っていなかった。シュウォブがボックスヒルのメレディス宅を訪れるのは、1894年秋のことである(Pierre Champion, *Marcel Schwob et son temps*, Bernard Grasset, 1927, pp.129-130)。
- (27) ペネル夫妻のサロンの様子については、マックウォースの研究に依拠した(*op.cit.*, pp.131-132)。
- (28) *EV, f° 91.*
- (29) *EV, ff.91-92.* ペネル宅でのピアズリーとの会話の思い出は、ルフェーヴルとの対談においても語られている(F. Lefèvre, *op.cit.*, p.13)。
- (30) ヴァレリーが、ボックスヒルを訪ねたのは6月24日のことではないかと推測される。ここで、註(7)で触れた、ロンドンからのジッド宛て書簡の日付(1894年7月9日)を問題にしてみたい。以下の理由から、この手紙の末尾の文章、「近々、メレディスに会いに行かなくてはならない」(*Corr. G/V, p.206*)という文章は、六月中に書かれたものではないかと推定される。第一に、ヴァレリーはメレディスから招待の手紙を受け取っているが(*EV, ff. 92-93: Mackworth, pp.134-135*)、その手紙の日付は94年6月20日であり(ただしマックウォースの引用には日付が記されていない)、ヴァレリーは「次の日曜日、つまり6月24日に「ボックスヒル行きの列車に乗った」(*f° 93: p.135*)と語っている。ヴァレリーの日付に関する記憶はあまりあてにならないとはいえ、この点については信用していいのではないと思われる。というのも、メレディスに会うことは94年のロンドン旅行の目的のひとつであり、シュウォブに紹介文まで書いてもらいながら、返書を受け取ってから二週間以上も会いに行かないというのは考えにくいからである。それに、何よりもメレディスの方から「今週中はずっと

我が家において、午後の四時以降来訪をお待ちしています。金曜日、土曜日、日曜日」(f°90, p.135)、つまり6月22日、23日、24日という指定がある。最後に、ジッドへの手紙がメレディスからの手紙を受け取ってから6月24日までの間に書かれたと考えたほうが、「出発前に——つまり月末までに、君からの手紙が受け取られるよう、はやく手紙を書いてくれ」(*Corr. G/V*, p.206)という文面が理解されやすいのではないだろうか。これはあまり強い根拠にはならないとはいえ、出発前に「ロンドンにもし六月行くとすれば、一ヵ月弱のことになるだろう」(1894年5月25日付けジッド宛て書簡: *Ibid.*, p.203)と書いていること、7月14日にはパリからジッド宛てに手紙を書いていることから「月末」が七月末を指しているとは考えにくい。

- (31) Lucienne Julien Cain, *Trois essais sur Paul Valéry*, Gallimard, 1958, p.193 (note de la page 173).
- (32) *EV*, f°93: Mackworth, p.135.
- (33) *EV*, f°94: Mackworth, p.135.
- (34) *Monsieur Teste I*, BN ms, f°1. 恒川邦夫氏が指摘されているように、当然テスト氏とデュパンの関係、ポーの一連のデュパン物と『テスト氏との一夜』との関係、さらにはポーのヴァレリーに対する影響のさまざまな局面が問われなければならない(前掲論文、29-30頁)。しかし、ここではあくまでもヴァレリーのロンドン体験との関係において問題となる点に論を絞ることにしたい。なお、『テスト氏との一夜』については、恒川氏の訳業に基づきつつ、拙訳させていただいた。
- (35) *Cahiers 1894-1914*, 1894, I, 95.
- (36) *Paul Valéry, Exposition du centenaire*, Bibliothèque Nationale, 1971, p.121 (n° 475)によれば、「ロンドンで開始、18(...)」という言及を含む草稿が存在する模様である。つまり、公開されている草稿に見られる「18...」という記述は、「1894年、ロンドンで書き始めた」というヴァレリーの覚書ということになる。しかし、アガート・ルアール・ヴァレリー作成の年表によれば、『テスト氏との一夜』が書き始められたのは1894年8月、『騎士デュパンの回想録』が1895年となっていることから、少なくとも年表作成時(1957年)にはそのような決定的な言及を含む草稿は見発まされていなかったと推定される(*OE I*, pp.22-23)。そこから、カタログの記述はヴァレリーの言葉ではなく編纂者の解釈なのではないかという疑問も生まれるが、公開されている資料には限界があるので確定できない。いずれにせよ、『カイエ』のノートから、ヴァレリーが『騎士デュパンの回想録』をロンドンで展開される作品として書き始めたことは確かだと思われるので、本論ではこの点だけを問題にすることにしたい。
- (37) *Lettre à Gide*, juin (?) 1894 (*Correspondance Gide/Valéry*, p.205-206). ヴァレリー

はロンドンからのレニエ宛て書簡においても、「金融街」というきわめて巨大で熱狂的な存在が同時代の文学に何の痕跡も留めてはおらず、ただ個人の「思いつき」が語られているだけだと語っている (Lettre à Henri de Régnier, juin ou début juillet 1894 [citée par J. Levaillant, *op. cit.*, p.188])。ロンドンで書かれた『カイエ』にも次のノートがある。「ラ・シティー/かくも情熱的で/かくも壮大で/かくも芸術が忘れ去っている——商業 / (...) / 株式取引所の変動」(Cahiers 1894-1914, 1894, I, 358)。

- (38) Lettre à Gide, 14 juillet 1894 (*Ibid.*, p.208).
- (39) *Ibid.*, p.208.
- (40) Cf. Cahiers 1894-1914, 1894, I, 78: 「論文 / (...) ロンドンとその商業。」
- (41) Monsieur Teste I, BN ms, f° 1.
- (42) Cahiers 1894-1914, 1894, I, 61.
- (43) Cf. 1894年8月25日付けジッド宛て書簡: 「この間、『方法序説』を読み返した。これはまさに今日書かれたものとしてもおかしくないような現代小説だ。その後の哲学が自伝的な部分を切り捨ててしまった点に注意したまえ。しかしながら、それは復活すべき部分だ。これまでは(女と寝るといった)ある情念の伝記ばかりが書かれてきたのだから、ある理論の伝記を書いてしかるべきだろう。」(Correspondance Gide/Valéry, p.213.)なお、イエシュアが、同時期同趣旨のアンリ・ド・レニエ宛て書簡、マルセル・シュウオブ宛て書簡を引用し、そこにヴァレリーの自伝に関する考えが読み取れるという論を展開している (S. Yeschia, *Valéry: le roman et l'oeuvre à faire*, Minard, 1976, pp.182-184)。
- (44) Monsieur Teste I, BN ms, f° 3. しかし、「わたしは1810年、ニューオーリンズで生まれた」に始まるその一節は、ヴァレリー自身の手で抹消されている。このことは、『テスト氏との一夜』の生成過程を考える上でひとつの大きな鍵になると思われる。
- (45) *La soirée avec Monsieur Teste*, 1896, OE II, p.17.
- (46) *Ibid.*, p.23.
- (47) Cahiers 1894-1914, 1894, I, 78. 同書 p.51, p.146, p.218 も参照のこと。なお、ヴァレリーの通貨に関する考察は、後に「信頼」Fiducia の分析の中で展開されることになる。例えば、C, 1924, X, 135-136.
- (48) Cahiers 1894-1914, 1894, I, 359.
- (49) *Ibid.*, p.100.
- (50) *Introduction à la Méthode de Léonard de Vinci*, 1895, OE I, p.1189-1190. 菅野昭正、清水徹両氏の訳業に基づきつつ、拙訳させていただいた。
- (51) Lettre de Lionel Declé à Paul Valéry, 28 mars 1896 (*Notes anciennes IV*, BN ms, ff.81-84: partiellement reproduite par B. Peeters, *op. cit.*, p.62) を参照のこと。引用

は、*Ibid.*, f° 82. ちなみにこの手紙によると、当時のパリーロンドン往復一等乗車券は72,50 フランであったという。

- (52) *EV*, f° 99: Mackworth, p.142. ただし、マックウォースの引用は一部のみ。
- (53) *EV*, f° 100.
- (54) *EV*, f° 99: Mackworth, p.142. なお、ヴァレリーはユイスマンスの忠告に従って、1895年3月18日、陸軍省の下級官吏(文書係)の試験に登録、同年5月14日に受験している。しかし、結果の通知は遅れ、来期からという展望が開けるのは1897年5月のことである。
- (55) 国立図書館の1971年のカタログによれば兄ジュール宛て(*op.cit.*, p.131 [n° 510])、マックウォースによれば母宛て(*op.cit.*, p.144)の手紙。内容から見てデックルからの手紙を受け取った3月28日のうちに書かれたもの。引用はマックウォースが英訳して掲載したものによった(*Ibid.*)。
- (56) Lettre de L.Decle à P.Valéry, 29 mars 1896 (*Notes anciennes IV*, BN ms, ff.86-87) を参照のこと。引用は、f° 87.
- (57) *EV*, f° 100: Mackworth, p.145.
- (58) *Ibid.* ただし、「もっとも…」に始まる段落は、マックウォースの引用にはない。またこの時の様子については、*Correspondance Gide/Valéry*, p.263 でも語られている。
- (59) 以下の記述は Mackworth, *op.cit.*, pp.143-146 及び Peeters, *op.cit.*, pp.63-64 に基づいている。
- (60) マックウォースによれば、当時のソーホー地区は安いフランス・レストランが軒を並べ、フランス最良のイギリス人たちを悦ばせていた。ことに「ケットナーズ」と「ソルフェリーノ」が有名、後者にはよりボヘミアン・タイプの人々が集まり、ホイスラー、シッカート等が常連だったという(Mackworth, *op.cit.*, pp.139-140)。
- (61) とりわけジョージ・スティーヴンズが印象的だった、とヴァレリーは語っている。キッチナー指揮のイギリス・エジプト軍がスーダンのマフディ教徒を攻めたとき、スティーヴンズは従軍記者として参加、「その作戦の模様を、『キッチナーとオムドゥルマンへ』With Kitchener to Omdurman のなかで見事に描き出している」(*EV*, ff.97-98)。ヴァレリーは1896年、スティーブン・クレーンの『赤色武勲章』The Red Badge of Courage: An Episode of the American Civil Warの評論を書こうとしており(*Cahiers 1894-1914*, I, pp.220-222)、彼の英語での読書の一傾向を示すエピソードと言えよう。
- (62) Lettre à Marcel Schwob, avril 1896 (citée par P.Champion, *op.cit.*, p.132).
- (63) *Ibid.*, pp.132-133.
- (64) Lettre à Gide, 2 avril 1896 (*Correspondance Gide/Valéry*, p.262).

- (65) *Ibid.*, p.263.
- (66) Lettre à Huysmans, avril 1896 (?) (citée par H.Massis, "Paul Valéry et la nuit de Londres", in *La Parisienne*, octobre 1954, p.1093).
- (67) C, 1925, X, 442. なお、生前ヴァレリーの口から直接この話を聞いた人の証言として、Dorothy Bussy, "Some recollections of Paul Valéry", in *Horison*, 77, may 1946, pp.319- 320; H. Massis, *article cité* ; "Suicide de Valéry?", in *Les Nouvelles Littéraires*, n° 1679, 5 novembre 1959 がある。衣装棚の中で首吊り用の紐を探しているうちにオーレリアン・ショールの本が目にとまり、それを読んで笑うことで救われた、というのが当人とマシスのバージョン。バッシーのバージョンでは、その本はアルフォンス・アレーのものとなっている。なお、C, 1900-1901, II, 75に、1925年のノートとはほぼ同じ用語でロンドンの風景が描かれながら、その後には展開されるものが自殺未遂の話ではなく、たくさんの夢が掻き立てられる状態の描写というノートがある。このことは、ロンドンが方向を見失わせる街であると同時に知的陶酔をもたらす街であるということだけではなく、さらにはこのふたつのテーマがある地点ではひとつのものになるということを示しているのではないだろうか。この点については次節で検討したい。
- (68) ヴァレリーは、94年のロンドン旅行が「六月というもっとも快適な気候」(EV, f° 98: Mackworth, p.141)に恵まれたのに対し、96年については「この時、ロンドンの気候は二月の気候でした。この季節、立ち籠める霧が南仏人であるわたしの心を苦しめました」(EV, f° 104: Mackworth, p.147)と語っている。ヴァレリーがロンドンにいたのは四月である。
- (69) Cf. 1896年4月4日付けピエール・ルイス宛て書簡:「ぼくは偉大な人物であるセシル＝ローズ氏への感嘆の念と、ぼくに給料を支払ってくれる『南アフリカ会社』によって生きている」(*Cahiers 1894-1914* I, 457 [note de la page 204])。
- (70) "Napoléon Bonaparte", 1894- 1895, *Proses anciennes*, BN ms (feuilles reproduites dans *Cahiers 1894-1914* II, p.340 [note de la page 49])。
- (71) "Notes autographes sur Cécil Rhodes", 1896 (reproduites dans *Exposition du centenaire*, *op.cit.*, p.132 [n° 514]; OE I, 1811)。
- (72) *Cahiers 1894-1914*, 1897- 1899, II, 49.
- (73) *Souvenir actuel*, 1938, OE II, p.982.
- (74) Edgar Poe, *L'Homme des foules, Nouvelles histoires extraordinaires*, coll.«Folio », 1951, p.110.
- (75) *Le retour de Hollande*, 1926, OE I, p.848.
- (76) Susanna Barrows, *Miroirs déformants: Réflexions sur la foule en France à la fin du XIX^e siècle*, Aubier, 1990, pp.103- 104; pp.125- 126; pp.150- 151.
- (77) *Cahiers 1894-1914*, 1895- 1896, I, 178を参照のこと。ルヴァイヤンは、タルド

が『模倣の法則』(1890年)の中でシャルル・ジッドの名を引用していることから、ヴァレリーがモンペリエ大学法学部で勉強中にタルドの説を知ったのではないかと推測している(J. Levaillant, *op.cit.*, note 2 de la page 254)。ヴァレリーがタルドの「模倣説」——「社会、それは模倣である。そして模倣、それは一種の夢遊症だ」——を知っていたのかどうかは興味深い。テスト氏のオペラの場面をこの視点から読む可能性が出てくるからである。シャルル・ジッドやアンリ・マゼルを通してこの説を耳にしていた可能性は高いが、当時の『カイエ』や書簡から直接それを確認することはできない。

- (78) *Cahiers 1894-1914*, 1897-1899, II, 233. なお、群衆を分析したノートとして、*Ibid.*, 34, 183がある。
- (79) Lettre à Henri Mazel, 1896 (reproduite dans *Paul Valéry: Pré - Teste*, Bibliothèque littéraire Jacques Doucet, 1966, pp.45-46)を参照のこと。ただし、この手紙の中でヴァレリーは、「わたしは社会主義をほとんど知らないことを告白します。しかしわたしは社会理論の中にばかげたことがたくさんあるを感じています」と語っている。
- (80) *EV*, f° 102 を参照のこと。
- (81) Mackworth, *op.cit.*, pp.149-150 に依拠した。メレディスからの電報については、*Paul Valéry*, Bibliothèque Nationale, 1956, p.27 [n° 161] に言及がある。
- (82) *Souvenir actuel*, 1938, *OE* II, p.983.
- (83) *Ibid.*, p.984. この間の事情については、*EV*, ff.102-103; F. Lefèvre, *op.cit.*, pp.14-16 でも語られている。
- (84) *Cahiers 1894-1914*, 1895-1896, I, 184.
- (85) *Une conquête méthodique*, 1897, *OE* I, p.981. Cf. H. Mazel, *La synergie sociale*, Armand Colin, 1896 p.5:「数が勝利を収めるのは、それが規律に従い、天才が作り出した構想を実行する時だけである。」
- (86) *Cahiers 1894-1914*, 1897-1899, II, 45.
- (87) *Une conquête méthodique*, 1897, *OE* I, p.982. 以下の文章で引用符のあるものは、*Ibid.*, pp.986-987 からの引用である。
- (88) Edmée de la Rochefoucauld, "Paul Valéry et l'Angleterre" in *L'Angoisse et les écrivains*, Grasset, 1974, p.86.
- (89) *Ibid.*
- (90) *Ibid.*, p.89. ヴァレリーのロセッティの翻訳の中で知られているものは、"Lilith de D.G. Rosetti", in *Chimère*, n° 10, mai 1892, p.183。また、ヴァレリーは、『アテネウム』に発表されたアインシュタインに関する無著名の論文を翻訳している("La théorie de la gravitation selon Einstein", in *NRF*, n° 75, 1^{er} décembre 1919, pp.1118-1122)。なお、ジュディス・ロビンソンは、1931年の英語で書かれた

『カイエ』の一節にコメントして、「ヴァレリーの英語は完璧からは程遠い！」と述べている (*Cahiers I*, éd. de la Pléiade, p.1427 [note de la page 9])。

- (91) *EV*, f° 6: Mackworth, p.135.
- (92) *EV*, f° 15.
- (93) Lettre à Marcel Schwob, avril 1896 (citée par P. Champion, *op.cit.*, p.132).
- (94) *C*, 1903, III, 117.
- (95) *Cahiers 1894-1914*, 1895-1896, I, 177.
- (96) *C*, 1905-1906, III, 827.
- (97) *Introduction à la méthode de Léonard de Vinci*, 1895, *OE I*, p.1165.
- (98) *Cahiers 1894-1914*, 1895-1896, I, 196.
- (99) *C*, 1934-1935, XVII, 738.
- (100) *Fin de Monsieur Teste*, 1946, *OE II*, p.74. (Cf. *C*, 1921, VIII, 340.)
- (101) *Correspondance Gide/Valéry*, pp.199-200.
- (102) *Cahiers 1894-1914*, 1900, II, 299: III, 516-517.
- (103) *C*, 1903, III, 81.
- (104) *C*, 1940, XXIII, 572.
- (105) 例えば、*C*, 1906-1907, IV, 103 を参照のこと。
- (106) Cf. *Cahiers 1894-1914*, 1894, I, 99: 「対象となるものがぼくに作り出せただろうと自分に思えるとき、ぼくはそのものを理解したのだ」。ただし、その分析の対象が、多くの場合、構築不可能のものであるという点が、ヴァレリーのエクリチュールの本質をなしていると思われる。この点については別の場所で検討することにした。
- (107) *C*, 1933, XVI, 509.
- (108) *Analecta*, 1926, *OE II*, p.721.
- (109) *Fin de Monsieur Teste*, *op.cit.*, p.74.
- (110) J. Levaillant, *op.cit.*, pp.186-187.
- (111) Lettre d'Herbert Bourke à Paul Valéry, 16 avril 1896 (*Notes anciennes IV*, f° 90: reproduite par Mackworth, *op.cit.*, p.153).
- (112) *EV*, f° 102.
- (113) Lettre à Gide, 2 avril 1896 (*Correspondance Gide/Valéry*, p.263).
- (114) Valéry Larbaud, *op.cit.*, p.34 (p.271).
- (115) *C*, 1927, XII, 427-428. なお、ピッケリングが、あくまでも『カイエ』における散文詩の題名と発表されたテキストの題名の比較という視点から、428ページに見られる「ロンドン橋の詩」という題と、「ロンドン・ブリッジ」という題を比較している (Robert Pickering, *Paul Valéry poète en prose: la prose lyrique abstraite des «Cahiers»*, Lettres modernes, 1983, pp.10-11)。しかし、話を題名だ

けに限ったとしても、427ページの「ロンドン ブリッジ」という言葉を無視することはできないのではないだろうか。

(116) *Poème en prose et "Poésie brute"*, BN ms, f° 119.

(117) *Choses tues*, 1930, *OE* II, p.514.

※最後となったが、既訳のあるテキストのうち、今回直接参照できなかったものについても、間接的にあるいは「無意識」に借用させていただいている部分があることをお断りし、関係各氏に感謝したい。

追記

本論執筆後に調べたことを二点補足しておきたい。

始めに、『騎士デュパンの回想録』について。註(36)で触れたように、1971年のBNカタログに、この草稿には「ロンドンで開始、18(...)」という言及があるという記述がある。この点に関して、カタログ作成に直接携わったフロランス・ド・リュシー女史にお尋ねしたところ、BN草稿部には現在公開されている草稿以外の資料は保存されていないこと、依拠すべきなのはBNカタログではなくあくまでもこの公開されている草稿の方であることを、口頭で(お笑いになりながら)お伝え下さった。『回想録』がロンドン滞在中に書き始められたことを直接示すような資料は、少なくとも現段階では存在しない、ということになる。

また、註(61)のヴァレリーの引用中にあるジョージ・スティーヴンズの本の正式な題名は、『キッチンとオムドゥルマンへ』ではなく、『キッチンとハルツームへ』*With Kitchenr to Khartum* (William Blackwood and sons,Edinburgh and London,1898)である。オムドゥルマンは、1884年のハルツーム陥落後、マフディ教徒の拠点となった街。ちなみに、スティーヴンズは本の後半部を「オムドゥルマンの戦い」の描写と分析に費やしている。